風土記

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉 第35号 2000年2月1日

文字資料としての金石文

日本古文書学会会長　立正大学教授文学博士　中尾堯

日本の古代と中世の文字資料についてをみるとき、その史料としての価値はもとより、種類の多様さと伝来の量とにおいて、世界に類例のないほど顕著である。

古文書に例をとってみると、最近、国宝に指定された「東寺百合文書」は二七、〇六七通で、その整理事業には長い年月がかかった。また、「東大寺文書」は九、四九五通の多きにのぼっていて、その過半を奈良時代からの古代と中世の文書が占めている。

これらは、紙に墨書した古文書類であるが、木材・石材・金属などの材質をもちいて、文字や文章をしたためたものが大量にある。石造の五輪塔や石碑、青銅製の梵鐘や仏具などに刻まれた文字資料で、その例は身近に多くみられる。

よく話題にのぼる、木札に墨書された「木簡」もそのひとつとみてよい。これらを総じて「金石文」とよんで、銘文を採集する試みは、長い歴史と伝統をもっている。

ところで、このところ「文字資料」という言葉がよく使われるようになった。文字を書き付ける材質や形状を念頭においたうえで、ここに記された文字のもつ意味を深く考え、文書を読み解くという意図が、この用語に示されている。古文書についてみると、楮紙とか斐紙という料紙の種類や、文書を書き終えた後の畳み方、封の仕方などを研究するのは、このためである。

金石文をみるうえでは、このような観察の方法はさらに大切となる。銘文を刻みこむ造形物の材料と、その形自体が意味をもっているからである。

たとえば、仏教の造形物によくみられる「仏果増進」という言葉の意味を考えてみる。これが梵鐘や鰐口などの仏具に刻まれていると、「鐘の音を聞いた生きとし生けるものすべてが、仏の功徳を増して幸せになるように」という、現世の祈りの言葉となる。

これが五輪塔や板碑などに刻まれていると、「亡き人が、仏の深い慈悲によって、さらに幸せな浄土に赴くように」という、死者追善の言葉となる。

同じ銘文であっても、それが刻まれているものの形によって、このように意味が異なってくる。

これは、もちろん信仰にかかわるものに限られるだけではない。土器に記された墨書の文字は、おそらくその所有や所属を表すものがあるはずで、なかには、大陸からの文字文化の伝来を物語る貴重なものもある。古代の銅鏡や鉄剣に刻まれた漢字の銘文が、大和王権の広がりを物語ることは、よく知られた史実である。

金石に刻まれた銘文は、その本体の種類や形だけにとどまらず、造られた時代や情況などによって、さまざまに意味をもつ。まさに「文字資料」という語にふさわしい、歴史の刻銘というべきであろう。

本州と穏やかな海ひとつを隔て、山と海浜に恵まれた四国は、神秘的な風光を慕って訪れる、信仰の旅人が多い。四国八十八ケ所をめぐる遍路のために、石仏や道しるべが街道ぞいに立てられている。霊場の寺々には、現世の幸せを祈り、亡き人の菩提をとむらう供養塔が並んでいる。

身近にある造形物に、丹念に刻まれた銘文に触れて、昔の人々の心情をはるかに偲ぶことは、まことに意義深いことである。これを貴重な文化財として、未来に伝えなくてはならない。

貞和二(1346)年題目板碑
埼玉県東松山市神戸　妙昌寺

企画展「記された歴史のメッセージ―収蔵品を中心として―」

～展示品から～

岡本　桂典

人間の五感の一つ、目で見ることで我々は文字や形を認識し、そして意味を脳で理解している。

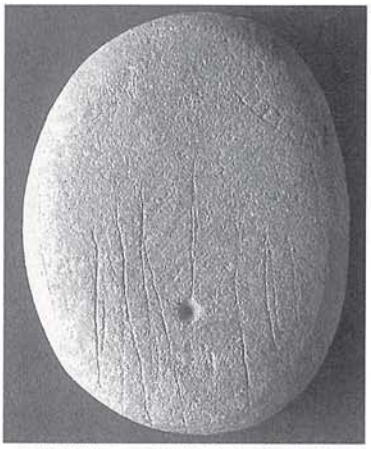
現代社会の情報技術は、驚くほどの速さで多くの分野に浸透してきている。その影響で日本の印刷所の活字は滅びようとしている。活字が滅びると言ってもそれは、文字自体が無くなるわけではない。文字は、コンピューターのフォント上にデジタル記号として生きている。「モノ」としての重たい鉛活字は、印刷所から姿を消しつつある。そして、軽くて扱いやすいデジタルフォント（電子印字）に移行している。今世紀、我々は劇的ともいえる文字記載の変動のなかに生きている。まさに、西洋の印刷革命にも匹敵するデジタル印刷革命の歴史の中に私たちはいるのである。

文字は一般的に書くと表現される。現在は、打つという方が多いかもしれない。また、文字は記すともいう。しかし、石などに書く以外に石に刻むという行為がある。印章の文字は彫るという。印判や花押のように捺す文字もある。貨幣に記された文字のように鋳る文字もある。文字は多様な方法で表現されている。つまりそこに受け皿ともいえる「モノ」が介在しているのである。歴史の文字は、物質的な存在「モノ」でもあった。

今回の企画展では、「モノ」に記された文字について考えてみることにした。収蔵品の考古・歴史・民俗資料の中から文字や絵画を記したものの一部を紹介し、そこに記されたメッセージを読みとってみたい。

縄文人の線刻

幡多郡西土佐村宮崎・大宮遺跡から縄文時代後期の6㎝ほどの扁平な石に、縄文人が線刻した縄文時代後期の線刻礫が発見された。女性の姿を蓑状のスカートのような着衣と下半身を小穴により表している。女性の姿を線刻した像は、豊穣を祈る祭りに使われたものと思われる。縄文人にとっては、不可思議な自然に対する畏怖と畏敬の念を表した宗教的なものと考えられる。



線刻礫　西土佐村教育委員会蔵

弥生人の絵画―絵画を鋳る銅剣―

弥生時代の土器や青銅器などに絵画を描くものがある。香美郡野市町兎田八幡宮所蔵の銅剣には、「シカ・シカ・サギ・サギ（下半身）」「サギ・カエル・カマキリ」の絵画を鋳だしている。「シカ」は、弥生時代の絵画の中で最も多く登場する動物である。「シカ」は、水稲農耕儀礼における稲の生育を司る神の一つであったと思われる。銅鐸に描かれた絵画をみてみると、弥生人は水辺に集まる生物たちを多く描いている。弥生人は水辺の生物にも神の姿をみたのではないかと考えられる。つまり、弥生人はシャーマニズムの世界に生きた人々でもあった。絵画が描かれた「モノ」は、農耕神が宿る依代として意味をもったのであろう。銅剣の絵画は、農耕と自然＝神をあらわしたものと思われる。我々が忘れかけた大切な姿を垣間見せてくれている。

絵画銅剣絵画部分　野市町兎田八幡宮蔵

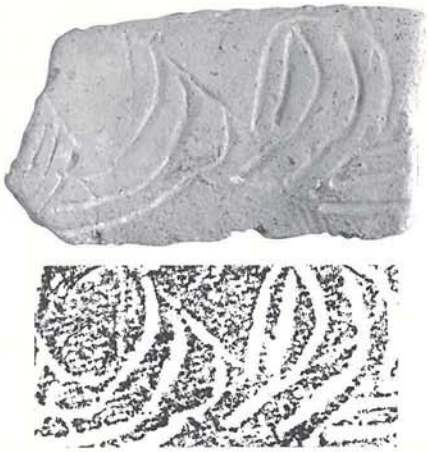
古墳時代の絵画

中村市石丸遺跡から土師器口縁部内面に描かれた小さな線刻土器片が出土していたことはあまり知られていない。舟を描いたものと想定されている。

土器片は欠損によって右の絵は左半分が残り、左の絵は右半分が残っている。そこで拓本を取り左右入れ替えてつないでみると一つの絵のようになる。舟であれば中筋川に浮かんでいた舟を描いたものかも知れない。

土佐山田町伏原大塚古墳は、県内唯一の円筒埴輪を出土した後期古墳であ

る。そこから出土した円筒埴輪の一点の上部に篦書工具による螺旋状の文様がある。埴輪には、渦巻文が描かれたものがあるが、それらについては呪的性格によるものという指摘がある。伏原大塚古墳の螺旋状の文様もあるいは呪的性格をもったものであるかも知れない。呪的性格をもったものであるとすれば円筒埴輪が古墳上のどの部分に立っていたのかが問題となろう。



絵画土器片　古墳時代

古代の墨書土器

墨で墨書された土器をいう。ここでは絵画も包括する。南国市土佐国衙跡の発掘で土師器高坏の脚部破片内面に「官」と墨書された土器片が出土している。「官」は、役所を意味する文字で官衙遺構の存在を想定させるものである。

五十六億七千万年後に開かれるタイムカプセル～埋経～　ー瓦経ー

釈迦の入滅後、二千年経つと修行を行っても悟りが得られず、さらに正しい行いが出来ない時代がやってくると考えられていた。日本では平安時代の永承七（一〇五二）年が末法の初年にあたるとされている。当時、人々は自然の猛威や自分の目に映る社会の退廃は、末法に入ったために生じたと考えた。末法の世には、仏教の教えが衰え、五十六億七千万年後にやっと弥勒如来が現れて説法し、再び仏教が栄える時代がくると信じられていた。その時に釈迦の説いた経典が無くては説法をすることが出来ない。そこで、経典を長く保全するために地中にタイムカプセルという形で納めた経塚が営まれた。紙に書写され経筒に入れ営まれた紙本経もあるが、平たい瓦状のものに経典の文字を書写し窯で焼いたものもある。これを瓦経といっている。

徳島県犬伏瓦経塚の瓦経片
平安時代

瓦経に書かれた一文字一文字の経典は、人々の遠い遠い未来に対する祈りが込められている。人々は再び再生し、仏の説法の席に参列したいという希望があったのであろう。社会に不幸や病、無道徳が蔓延する時代、カリユガ（暗黒の時代）の時代における人々の願いは、同じであることを我々はこの文字から知ることができる。

中世の呪術の札

南国市田村城館跡の溝から薄い板に文字を書いた札が出土している。また、春野町芳原城跡の堀からも同様の札が出土している。両者は共に板に小円孔があり、札が打ち付けられて用いられたことを物語っている。この二枚の札は、大般若経転読札で、中世の年号が墨書されている。これらの札は境界内の安全、招福除災を祈るために用いられたものであろう。それを板と文字で表したものである。当時の人々も今の人々も祈りに対する気持ちは変わっていないようだ。

禮字菊花柄鏡　17世紀

不思議な文字を鋳る柄鏡

高知城の懐徳館から移管された資料群のなかにみなれない青銅製柄鏡がある。表裏にかなりの緑錆がみられ、布痕が付着している。一見日本製の柄鏡にみえるが、現在までその性格は不明であった。鏡の裏の中央には、「禮」字銘、下端には二行にわたり「藤原／光長」銘、上端には「湖州／薛晋／侯造」とある。湖州（中国）の薛晋なる工房で造られたことがわかる。この柄鏡は日本の柄鏡をもとに作られた中国製の鏡で十七世紀のものと考えられる。この柄鏡は残念ながらどのような経路で入手されたのか不明である。布や土が付着した跡があることから出土品の可能性もある。全国で2例しか類例のない柄鏡である。

これらの紹介したものの他に、篦書き土器や懸仏、近世・近代資料についても紹介したい。

民具に記された文字

中村　淳子

民具を見たら、どこかに文字が記されていないか探してみよう。

農家の納屋や旧家の蔵で出番を待つ現役の民具、或は民具館や博物館に収蔵されて今や別の役割を担う民具。それらのすべてに文字があるわけではないが、鍬の柄やモロブタに押された焼印の家印、唐箕や千歯扱きに墨書された年号などいろいろな文字が発見されるに違いない。

そのような文字は、割と目立つところにあって見つけやすい。それと言うのも、はっきりと誰かに何かを伝える目的で記されているからなのだろう。

記された文字の意義

先学の民具の定義は、民具に記された文字を見ていく上で、示唆に富んでいる。

渋沢敬三は、「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身辺卑近の道具」（『民具蒐集調査要目』一九三六年）を民具とした。そのような民具に記された文字には、製作や使用など技術に関わる情報を伝えるものがあると考えられる。また、民具の分類項目としては、「一、衣食住に関するもの　二、生業に関するもの　三、通信・運搬に関するもの　四、団体生活に関するもの　五、儀礼に関するもの」（同右）があげられている。こうした分類を活用し、民具の文字を見ていけば、項目毎に何らかの傾向が出てくるのではないかと推察される。

宮本馨太郎は、渋沢の定義を踏まえ、「民具とは、一般民衆が日常生活の必要から製作・使用してきた伝承的な器具・造形物の一切を包含し、国民文化または民族文化の本質と変遷の解明のために欠くことのできない資料である」（『民具入門』一九六九年）とした。宮本は民具の定義に、民具研究の方向性と、民具の重要性を盛り込んでいる。

民具研究においては、その形態等を比較することで文化の伝播や変遷を解明していく方法があるが、その際、民具に記された年号等によって、よりこまやかな歴史の中に民具を位置付けていくことができる。民具に記された文字を調べる大きな意義がそこにある。

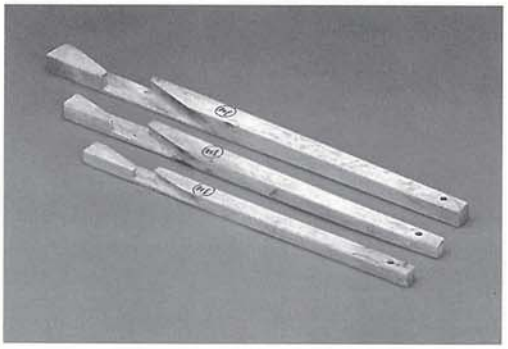
また、文化とは人間の物心両面の成果であるといわれている。民具という「物」の背後にある「心」に迫ろうとするときに、何らかの意図を持って人が記した文字というものは、重要な手掛かりとなり得るだろう。

では、それらの文字は、具体的には誰に何を伝えようと意図されているのだろうか？

所有を表す

四万十川の川漁師のひとりから当館に寄贈された漁具等の幾つかに、「㊂」という焼印が押されている。カナツキを打ったり、箱眼鏡を作ったり、大概の漁具は手作りしてしまう、その方の名前は三男さんという。つまり焼印は名前の一字をとったものだった。

また、山里の家からやってきた民具の中に、「向」という焼印が押されているものがある。寄贈者からは、「向」とはその家の屋号であると教えられた。さらに、漢字の「向」は隠居で、片仮名の「ムカイ」が母屋という使い分けも為されていたという。



釣竿を真直ぐに伸ばす「のべ棒」に押された三男さんの「㊂」という焼印

こうした名前や屋号には、物の所有者が自分であることを表明しようとする意図がみられる。共同で作業するときに使う物や同じ物を多くの人が持っている場合には、特にそうした印が必要とされるだろう。

また、「向」「ムカイ」という屋号標記の違いは隠居制を反映しており、民具に記された文字が村や家の暮らしを反映する貴重な事例である。

覚書として

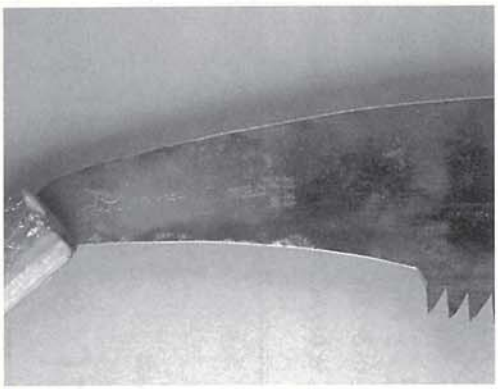
春三月、民俗展示室の企画コーナーに飾る雛人形の中に、東京で求められたという華麗な内裏雛がある。その寄贈者には、男の子に贈られた雛だと、意外なエピソードをうかがった。

それがどのような資料であるかを知るために聞き取り調査は欠かせない。だが、記された文字があれば、さらにそこからも資料に関する情報が得られる。件（くだん）の内裏雛を納めた箱にも「大正七年戊午三月吉日」「東京十軒店　五世東光齊玉翁作」などの墨書があった。

また、ある時、旧家の蔵の中を拝見する機会があった。蔵の二階には食器や調度品を納めた箱が整然と並び、それぞれに入手年月や品名、用途などが墨書されていた。

箱に書かれた品名などによって、必

職人の日記を納めた本箱の紀年銘



鋸にみえる「片廣」という鍛冶屋の銘

要なものがどの箱に入っているかは一目瞭然であり、元通り箱に片付けるときにも便利である。してみると箱の墨書は、家族や親類、自分自身に対しての覚書となったと思われる。また、そうした品を貸し出すような他者に対しては、記された所蔵者名も役立つ。

またその一方で、代々大切に伝えられた品々を納める箱の墨書は、子孫に宛てたメッセージでもあるのだろう。

年号の記された民具「紀年銘民具」には、こうした箱の他、唐箕や千歯扱き、糸枠等さまざまなものがあり、それらは私たちに物の歴史を語ってくれる。

製品を宣伝する

先頃、来館したある方が、展示品の鋸や斧を指さしつつ、「どこそこの鍛冶屋が打ったもん」と、同行した方に説明している姿を見かけた。ご自身も鍛冶屋であるその方は、銘を見れば製作者がわかるのである。もちろんその方も鮮やかな手並みで銘を切る。

専門の職人によって作られた製品には、製作者の銘や商標が記されていることも多い。製品を手にした人が再び同じ品を買いたいと考えた時のために、製作者や販売者がそれらを記しているのであり、宣伝の意図が込められている。併せて「請合」「天下一」などの宣伝文句もみられる。

こうした商標などからは、民具の流通に関するさまざまな情報を得ることができる。

神仏に願いをこめて

絵馬や幟(のぼり)など、神社や寺院への奉納物に記された文字は、人が文字によって何かを伝えようとする相手が人とは限らないことを教えてくれる。私たちはそれらの文字から神仏への祈願や満願成就の感謝、畏敬の念などを読みとることができる。また、それらの文字には自分たちの威勢を誇る意図や、自分たちの覚書としたり子孫のための記録とするなどの意図もあるだろう。

松尾天満宮引き幕(部分)　土佐清水市松尾地区寄託

(右上)同奉納年　(右下)同奉納者

だからこそ、文字は書き手の意図を超えて、さまざまな情報を引き出す糸口ともなるのである。例えば、土佐清水市の松尾天満宮の引き幕には、「明治三拾歳酉九月吉良日」「松尾村若連」の文字がみえる。当時、松尾天満宮の回り舞台で演じられていた芝居は、村人の大きな娯楽であり、若者達がそうしたイベントを取り仕切っていたという。引き幕の文字は、そのようなかつての暮らしの一端を物語るものである。

加えて言えば、その絵柄は海女が竜宮から珠を取り戻すという幸若舞の「大職冠」の一場面である。室戸市佐喜浜の俄段尻幕等にも同様の絵柄があり、物語の流布を示すものである。

暮らしのメッセンジャー

私たちは民具に記された文字によって、年号をはじめ製作者や所有者、用途など、記した人が伝えようとした情報を受け取る。さらに、そこから民具を介した人々の関係や暮らしの姿についても明らかにしていくことができる。

民具に記された文字は、それを記した人の直接の子や孫ばかりでなく、後の代という意味での子孫、すなわち私たちにとっても、有意義なメッセージなのである。

歴史を学ぶことは未来を語ること
ー姥棄て山譚（はなし）の教訓ー

坂本　正夫

もう三五年も前のことになるが、昭和四〇年五月一九日のことである。前夜、吾北村思地で一泊した私は、そこから伊野町出来地まで歩いた。その時、途中の弘瀬という集落で逢った老女に聞いたのが、次の話である。

昔は六〇歳になったら、お爺さんでもお婆さんでも、年寄りはみな山へ連れて行って棄てにゃあいかざった、そういう決まりじゃったそうですねえ。

そんで、ある男が六〇歳になった母親をフゴ（畚）へ乗せて、息子に片棒かつがせて棄てに行ったそうですねえ。奥山へ行って、そこの岩の下へお婆さんを棄てちょいて、

「さあ、規則どおり年寄りは棄てたけ、早う帰ろうぜや」ちゅうて、フゴをそこへ置いちょいて帰りかけたところが、息子がねえ、

「このフゴを持って帰る」ちゅうていいますと。そんで、

「そがな物はいらんけ、棄てちょけや」ちゅうたら、息子が、

「このフゴは持って帰って、くるめ（保管し）ちょかにゃあいかん。今度お父さんを棄てに来る時に使わにゃあいかんけねえ。持って帰る」ちゅうていいますと。そんで、

「お前は、このお父さんを棄てるつもりかや」ちゅうて聞いたら、

「お父さんも、お爺さんやお婆さんを棄てたろう。今度は僕がお父さんとお母さんを棄てる番じゃあけ、その時にいるけねえ。持って帰る」ちゅうていいますと。

「おらは、山へ棄てられるのはいやじゃあが」ちゅうていうたら、息子が

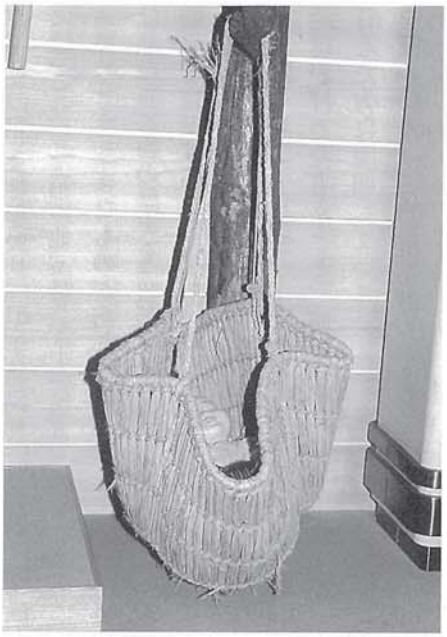
「そんなら、お婆さんを連れて帰ろうや」ちゅうていいますと。

そんで、お父さんも改心して、またお婆さんをフゴへ入れてねえ。二人でかいて家へ戻りましたと。

まあ、こうゆういわれで年寄りを山へ棄てるのがやまった、という話を古い人から聞いちょりますがねえ。

これは「姥棄て山」と呼ばれている民話だが、同じような話は高知県下はもちろん、全国各地に数多く伝承されている。お年寄りを棄てたという断崖や洞窟などがある所もあるが、これはあくまで民話であって歴史的事実ではない。

柳田国男によると、姥棄て山譚には四つのタイプがある、という。その一つは先の話のように、息子が親を諌める話。二つ目は孝行息子が王さまの命令にそむいて親を隠して養うが、隣国から難題をふっかけられて王さまが困る。息子が隠している親に相談し、難題を解決して褒美をもらう話。三つ目は意地悪な嫁が夫をけしかけて姑を山へ棄てるが、心のやさしい姑が神の加護で宝物を得る話。四つ目は棄てられる母親が山へ行く途中、木の小枝を折って道端に置くが、これは息子が家へ帰るときに道に迷わぬ目印にするためだった、という母親の愛情を説く話である。



藁（わら）フゴ　（民俗展示室）

「姥棄て」というと、まことに残酷な響きを持つことばであるが、話の筋はいずれも親の情愛に感動して連れ帰った、とか年寄りの知恵で国家の危機を救った、あるいは子供に真実を教えられた、というものである。とにかく、姥棄て山の民話は経験（歴史）に学ぶことの重要性と、時と場合によっては柔軟な思考と行動をとるべきである、ということを説く教訓話である。

ところで、いよいよ二〇〇〇年になった。来年からは二一世紀である。二十世紀は科学技術の進歩で飛躍的発展をとげたが、戦争や宗教対立、飢餓、環境破壊、効率主義による人間性の喪失など物質中心社会の矛盾が噴出した時代でもある。

二一世紀の課題は民族や宗教の違いを超えて国際化し、人間と自然が真に共生できる社会を創り出すことだろうと思う。そのような夢を語る時には、常に歴史に学ぶ心が必要である。過去を知り、未来を語る場が高知県立歴史民俗資料館である。

歴民館の文献史料

元親の書状を読む 其の二

野本 亮

起請文

去以来互無別心通顕然候処、弥為
無二之儀御神書等令分明候、勿論
我等事毛頭不可有疎意候、若此旨
於偽者
日本國中大小神祇八幡大菩薩御
罰可蒙罷者也、仍起請如件

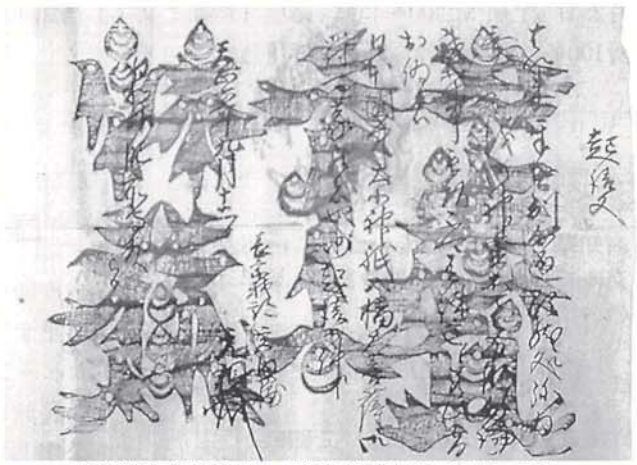
（前書）（神文）

長宗我部宮内少輔
天正六年九月十二日　元親（花押）

日和佐肥前守殿
（まいるカ）

註
日和佐氏に対しては、前年に元親の実弟香宗我部親泰（阿波軍代、安芸、海部（のち牛岐）城主）から起請文が出されている。裏切る可能性が無くなった段階で牛玉紙を使う外交戦術だったようである。

長宗我部氏・日和佐氏
関係略地図



長宗我部元親起請文　日和佐肥前守宛　31.2×23.5cm

故吉田萬作氏は、土佐の中世史研究推進のためには、原本の解読が不可欠であり、県外に流出した史料の探索と保存の必要性を声高に主張されてきた。

氏の数ある功績の中でも、とりわけ「濱家文書」の所在を突き止めたことは称賛に値する。

昭和五二年、高知大学名誉教授山本大氏との共同調査において、「濱家文書」の原本を確認した氏は、『土佐史談』一四九～一五〇号においてその全容を明らかにされた。

実際、この史料報告がなければ、当館の特別展「四国の戦国群像」（平成六年開催）の開催は難しかったし、本年度実現した「濱家文書」の一括購入の話もあり得なかったと思う。

現在の当主、秀孝氏が「あの時、吉田さん達が来られなかったら、この史料が土佐に還ることはなかったでしょうね…。」と何度もおっしゃられていたことを思い出す。

吉田氏も論述されているように、この「濱家文書」の最大の魅力は、中世末から近世初頭の激動期を乗切った阿波日和佐氏の受信文書がそっくり遺されている点にある。（無論、完全にではないが…）

文書は大別すると三つの時代に分類することができる。

すなわち、阿波の東部海岸、日和佐城主として当地方に君臨していた時期。次に、上方との交易のため当地方を戦略の中心の一つに据えていた長宗我部元親・盛親に臣従していた時期。そして、山内氏入国後、香美郡赤岡村の浦大庄屋濱氏として活躍した時期である。

さて、当該史料の中で特に注目されるのは、何といっても長宗我部元親の書状類（二通のうち一通は「起請文」）である。

前回の『岡豊風日』で紹介した「元親書状」は表装による裁断がみられたが、本件の場合、二通とも裏打処理はあるが、ほぼ発給されたときの状態を保っている。

この「起請文」は、天正六（一五七八）年九月、土佐方となった日和佐肥前守に対し、元親より発給されたものである。文中に「御神書」とあるように、元親が両家の将来にわたる不動の同盟関係を日本国中の神々に誓う形式となっている。

元親の起請文は他に、伊予金子城（新居浜市）主金子備後守元宅の御子孫宅に現存するものと併せ、現在僅か二通しか確認されておらず、大変貴重なものである。

料紙は熊野の牛玉宝印（那智瀧宝印の五字を烏点を以て表したものを版にして摺ったもの）の裏を使用している。

（続く）

長宗我部元親起請文　金子備後守宛　金子家和氏蔵

平成12年2～3月の催し物

企画展「記された歴史のメッセージ―収蔵品を中心として―」
3月17日(金)～5月21日(日)

日本で文字が一般的に使用され始めて、私たちは色々な「モノ」に文字を記してきました。その方法は墨書したり、刻んだり、鋳たり、刻印したりと多用な方法で「モノ」と一緒に文字を残してきました。

「モノ」に記された文字。私たちは文字をどのような形の「モノ」に残してきたのでしょうか。記された文字は何を物語っているのでしょうか。今回の企画展では「モノ」と文字の関係を考えてみたいと思います。

関連行事　3月25日（土）PM2:00～4:00　講座「墓標と文字」当館主任学芸員　岡本　桂典
先着100名、聴講無料、はがきで申込。

歴民サークル会員募集中

このサークルは、高知県立歴史民俗資料館をご活用いただくためのサークルです。館の企画展や講座、見学会および各種催しものの情報をご提供します。

会　員　特　典

こんなにお得！

☆ 会員証の提示により常設展および企画展（特別展）へご優待します。（当会負担）
☆ 年4回発行する館広報「岡豊風日」等をご送付します。
☆ 館の行う企画展、講演会、史跡めぐりなどの案内を送付します。
☆ 文化活動（句会、生け花等）が目的の場合、岡豊山公園内の民家をご利用できます。

来年度からの新特典！

☆ 館編集の図録、紀要などすべての書籍を割引価格でご購入できます。
☆ カフェレスト菜菜にてコーヒーのサービスがあります。（お1人様1回限り）
☆ 1年間の館の活動記録「年報」をご送付します。

会費：年額1,200円です。受付で直接か下記の口座へ郵便振替（住所・氏名・電話・年齢・生年月日・性別・勤務先を記入）でお申込みください。
01690-8-58321　高知県立歴史民俗資料館
れきみんサークル係

歴民館ホームページ開設

高度情報化の波は歴民館にも押し寄せてきています。遂に館から情報の発信ができるホームページを公開しました。

歴民館の企画展の情報や催し物の案内などを公開します。アドレスは次のとおりです。是非、アクセスをしてみてください。

http://www2.net-kochi.gr.jp/~kenbunka/rekimin/

岡豊風日（おこうふうじつ）第35号
平成十二年二月一日
編集・発行　高知県立歴史民俗資料館
〒783―0044　南国市岡豊町八幡1099―1
TEL　088（862）2211
FAX　088（862）2110
開館時間　午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
休館日　毎週月曜日（祝日及び振替休日にあたる場合は翌日）12月28日～1月4日、臨時休館あり。
入館料　通常期［常設展］大人（18歳以上）400円
団体（20人以上）320円
高校生以下は無料
療育手帳・身体障害者（1・2級）手帳・障害者手帳所持者とその介護者（1名）、高知市及び高知県長寿手帳所持者は無料
印刷・共和印刷㈱

《ひとこと》

早いもので、平成十一年度ももう僅かとなりました。あと一年足らずで二十一世紀です。私たちは、二十世紀にどのような歴史を残してきたのでしょう。（岡本）

岡豊山は、梅、雪柳、桜とこれから花々の季節を迎えます。ぜひ春の歴民へどうぞ。（曽我）

〔歴民館日録〕

月　日	出　来　事
12・5	企画展「道具が語る食の文化」閉幕
1・8	子ども歴史教室
	「民話の家③正月の話」